

知っておくべき先天性心疾患 その診断と治療法

水野 壮司

(東京どうぶつ心臓外科 / VeC Japan 循環器科 / 東京大学附属動物医療センター)

第1回 総論：先天性疾患を疑う症例が来たときに

はじめに

先天性心疾患へのアプローチ法ということで、連載させていただくこととなった。初回の今回は総論として、先天性心疾患を疑う症例が来院した際にどのような思考で検査していったらいいかについて解説する。

代表的な先天性心疾患の特徴的な所見や治療方法については次回以降の各論で疾患ごとに解説するが、本連載が一次診療施設の先生においても代表的な先天性心疾患について診断する一助になれば幸いである。

先天性心疾患を疑う症例は心雑音の精査、避妊去勢手術前に偶発的に心陰影の拡大が見つかった、多血症、呼吸促迫など、さまざまな主訴で紹介来院される。

先天性心疾患を疑う症例では心エコー図検査が最終的な診断の鍵を握ることになるが、身体検査や心電図検査からも多くの情報を得ることができる。それぞれの検査ごとに

どの疾患が疑わしいのか自分なりに仮説を立てて、検査が進むごとにその答え合わせをしていく感覚で診察にあたると、より興味深く診察を進めていただけるであろう。

また、各種検査を組み合わせることで自分の診断に矛盾がないかどうか確認をしていかなければ誤診につながってしまうこともある。実際に心エコー図検査、特にカラードプラー検査だけの情報を頼りに診断を下している場合に誤診されているケースを見ることも少なくない。呼吸状態が悪い症例を除き、基本的にはどのような症例が来院されても、身体検査はもちろんのこと、心電図検査、血圧測定(先天性心疾患では症例が小さすぎて測定できないこともある)、胸部レントゲン検査、心エコー図検査と一通りの検査を実施することをお勧めする。

問診

呼吸困難や呼吸促迫の有無、失神やふらつきの有無、咳嗽の有無、同腹仔がいる場合は兄弟犬や兄弟猫との成長の差があるかどうかなど聴取する。

疾患ごとの好発犬種や性差が報告されており、どのような疾患の可能性が高いのかを知っておくといいかもれない(表1)。

疾患	犬種・性差
動脈管開存症(PDA)	チワワ、キャバリア、コリー、ジャーマン・シェパード、ラブラドル・レトリバー、マルチーズ、ポメラニアン、プードル、シェットランド・シープドッグ、ウェルシュ・コーギー、ヨークシャー・テリアなど 性差:メス>オス
心室中隔欠損症(VSD)	柴犬、イングリッシュ・ブルドッグ、フレンチ・ブルドッグ、シェパード、ウェストハイランド・ホワイトテリア、猫など
心房中隔欠損症(ASD)	スタンダード・プードル、ボクサーなど
肺動脈狭窄症(PS)	テリア種、ビーグル、イングリッシュ・ブルドッグ、チワワ、ミニチュア・シュнауザー、コッカー・スパニエルなど
大動脈狭窄症(AS, SAS)	ブルドッグ、ボクサー、ゴールデン・レトリバーなど

表1. 疾患ごとの犬種特異性